

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 29 日現在

機関番号：17102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590248

研究課題名(和文) 発達障害者の「空気よめなさ」に対する支援的ユーモアによるレジリエンスへの効果

研究課題名(英文) Awkwardness in people with Autism Spectrum Disorder

研究代表者

田中 真理 (TANAKA, MARI)

九州大学・基幹教育院・教授

研究者番号：70274412

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、社会性の発達において重要な指標となる「気まずさ」の認識について、典型発達(TD)者の発達段階、ならびに自閉スペクトラム症(ASD)者の特徴を明らかにすることを目的とした。“気まずい”と感じる場面について、12のカテゴリーを得た。自己の信念や感情が他者のそれとは異なることへの気づきにより生じる気まずさ(不都合、想定外の言動、ネガティブ感情、感情のズレ)、会話で共有される話題や雰囲気や瞬間を瞬時に把握したり、自分と対照させて関係性をとらえることで引き起こされる気まずさ(雰囲気乱す、他者の存在)などである。ASD者の気まずさの認識に添った対人関係支援について考察した。

研究成果の概要(英文)：This study analyzed how people with typical development (TD) perceive awkwardness during different stages of life and contrast these perceptions with cognitions about people with autism spectrum disorder (ASD). Participants (ns = 214 people with TD, 111 people with ASD, ages 9-60) were asked when they felt awkward. Their responses were grouped into 12 categories and analyzed. The results showed that elementary school-aged TD participants felt awkward when another person's opinions or feelings opposed their own. High school students felt awkward in interpersonal relationships. ASD participants were especially less perceptive of awkwardness in the contexts of conversations and facial or non-verbal cues. However, they tended to feel awkward when they could not handle an issue on their own. The discussion concerned the characteristics and development of cognitions of awkwardness that people with ASD perceive in comparison to people with TD.

研究分野：発達障害学

キーワード：発達障害 気まずさ

1. 研究開始当初の背景

自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder; 以下 ASD)は、社会的コミュニケーションや対人的相互作用における質的な障害を示す(APA,2013)。このことには、日常生活で ASD 者が振舞う特異的な対人関係のとり方であり、「気まずさ」の理解が関わっている。「気まずさ」は、一方の意図や雰囲気に対し、もう一方の気持ちや言動が適合せず「しっくりこない」と感じた場合に生まれる。しかし、その「しっくりこない」と感じる程度は、場を共有する者の関係性、それぞれの心的状態、パーソナリティ、文化等によって異なり、非常に曖昧である。それらを瞬時に読み取ったり推測したりすることで、我々は「気まずさ」を認識する。

このような「気まずさ」の理解について、ASD 者を対象に検討することは、社会的対人関係支援の一助となるだろうと考えられた。

2. 研究の目的

我々は「気まずさ」を生じさせないように対処し、人間関係を円滑に保つことが可能になる。したがって、「気まずさ」への気づきは、社会性の発達において重要な指標といえる。そこで本研究では、典型発達(Typical Development; 以下 TD)者が認識する多様な「気まずさ」の種類と発達を明らかにしたうえで、ASD 者が認識しにくいまたは認識しやすい「気まずさ」について検討する。ASD 者の対人関係のとらえ方の特異性を明示することで、具体的な対人関係支援へとつなげることが可能になるだろう。

ASD 者の「気まずさ」の認識に関連する先行研究として、他者の心的状態を推測する能力に着目した「心の理論(Premack & Woodruff,1978)」に関する検討が該当する。その代表である誤信念課題は、他者が事実とは異なる誤信念を持つという表象の理解が求められ、ASD 者は TD 者に比べ課題の達成が難しいことが示されている(Baron-Cohen, Leslie, & Frith,1985)。一方、必ずある一定の割合で課題を達成する ASD 者が存在する事実も明らかにされている(Perner, Frith, Leslie, & Leekam,1989)。Bowler(1992)は、ASD 者の中でも特に言語能力の高い者は、より複雑な高次の誤信念課題をも通過することを明らかにしたうえで、たとえ課題を通過した ASD 者であっても日常生活の対人関係では依然特異的な行動を示すと指摘した。このことから、ASD 者は、課題場面での状況理解と日常場面での実際の振舞いに乖離があると推察される。そのような中、誤信念課題よりも発展的な課題により、他者の心的状態の推測に関する ASD 者の特徴をとらえ、ASD 者が日常生活の対人関係場面で示す特異的な振舞いの背景を明らかにしようとする試みが行われてきた。それらは、ある特定の場面として提示されたシチュエーションの中で、登場人物の発言に含まれた言外の意味や、振舞いの社会的逸脱度を理解すること

が求められる課題がり、シチュエーションの内容から大きく3つ(ストレンジストーリー課題、社会常識ストーリー課題、社会的失言課題)に分けられる。

これら3つの課題に関する先行研究より、ASD 者は、他者の発言そのものの真偽を判断したり非常識度を評定したりするような、他者から指示的に問われ求められる物事の善悪や正当不当等の明示的な社会的認知は可能である一方、他者の発言の意図・視点・感情など ASD 者自らの気づきが必要とされるような、暗示的な社会的認知には難しさがあるといえる。まさにその暗示的な内容を自発的に考慮する力こそが、日常場面で対人的な振舞いを行う際に必要とされる力であり、ASD 者が苦手とするために特異的な行動に結びついてしまうと解釈できる。したがって、ASD 者が日常どのような場面で「気まずさ」を認識するあるいは認識しにくいのかを検討することは、ASD 者が実際の場面で他者の意図・視点・感情等をどのように考慮しているのかを検証することになる。

さらに、上述した先行研究における課題は、それぞれのストーリー内である種の「気まずさ」が生じるシチュエーションであるが、それは非常に多様な「気まずさ」のごく一部でしかない。その結果から ASD 者が全ての「気まずさ」の認識が難しいと結論付けることは早急であり、「気まずさ」の種類に応じた発達の視点をふまえて検討されるべきである。

そこで、本研究では、まず、TD 者および ASD 者がどのような場面で「気まずさ」を認識するのかという点を、その場面を自由に表現してもらう方法により引き出し、両者の回答を併せて「気まずさ」カテゴリーを精緻化する。そのうえで、TD 者の「気まずさ」認識の発達過程を明らかにし、さらに、ASD 者の「気まずさ」認識の特徴を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 対象者

TD 群は、小学生(3~6年)166名、中学生383名、高校生200名、高卒以上(18~50代)214名の計963名であった。ASD 群は、小学生(3~6年)12名、中学生19名、高校生56名、高卒以上(18~50代)24名の計111名であった。

(2) 手続き

「あなたが“気まずい”と感じるのはどういうときですか？」という質問への自由回答を面接または質問紙で求めた(回答数に制限なし)。補足説明として、「“空気が読めない”と感じるときはどのようときですか？」という質問を文章または口頭で行った。

(3) 分類方法

複数の場面や感情が混合した回答については、特定の場面や感情を述べた部分ごとに区切り1個の言及としてカウントした。TD 群からは2136個(平均2.2個)、ASD 群からは

258 個(平均 2.3 個)の言及が得られた。12 のカテゴリーが生成され、その分類枠に基づき評定者 2 名で言及の分類を行った($\kappa = .66$)。以下の解析には、SPSS17.0 を使用した。

4. 研究成果

(1) TD 者における「気まずさ」認識の発達

TD 者における「気まずさ」認識の発達を検討するため、対象者ごとに言及数に占める各カテゴリーの言及率を算出し、逆正弦変換を行った。逆正弦変換値を用いて、年齢群(小, 中, 高, 高卒以上)の一元配置分散分析をそれぞれ行った。その結果、「A 字義通り」「L 図々しい」を除く 10 カテゴリーで年齢群の主効果がみられたため、下位分析を行った。小学生は「D 不都合」「F 想定外の言動」「H ネガティブ感情」で他の 3 つの年齢群よりも言及率の平均値が有意に高かった。また、「J 感情のズレ」では小学生が中学生と高校生に比べて言及率の平均値が有意に高いことが示された。高校生は「K 性・恋愛」のカテゴリーで他の年齢群よりも言及率の平均値が有意に高かった。また、「G 他者の存在」について高校生は小中学生よりも有意に高い割合で言及することが示された。中学生および高卒以上に関しては、他の年齢群よりも有意に多く言及するカテゴリーは存在しなかった。中学生については、すべてのカテゴリーにおいて言及率の平均値が全体的に低めであることが特徴的であった(例えば「E 道徳」「G 他者の存在」「I 関係性」など)。

(2) ASD 者における「気まずさ」認識の特徴および発達

ASD 者においては各セルの回答数が少ないため、年齢群を 2 群にまとめ(小中, 高校以上)以下の分析を行った。なお, ASD 群におけるカテゴリー A, L では各年齢群で発言がみられなかったため、分析は行わなかった。まず, ASD 者における「気まずさ」認識の発達を検討するため, TD 群の回答と同様, 対象者ごとに言及数に占める各カテゴリーの言及率を算出し, 逆正弦変換を行った。カテゴリーごとに t 検定を行った結果, すべてのカテゴリーで年齢群の間に有意な差はなかった。

次に, TD 者との比較の中で ASD 者の「気まずさ」認識の特徴および発達を検討した。障害の有無(TD 群, ASD 群) \times 年齢群(小中, 高校以上)の二元配置分散分析を行った。「B 雰囲気乱す」において障害の有無 \times 年齢群の交互作用, また, 「G 他者の存在」において年齢群の主効果および障害の有無 \times 年齢群の交互作用がそれぞれ有意であった。下位検定の結果, 両カテゴリーともに, 高校以上において ASD 者よりも TD 者の方が言及率の平均値が有意に高かったほか, TD 者において小中学生よりも高校以上で言及率の平均値が有意に高かった。

これに対し, 「D 不都合」「F 想定外の言動」においては, 障害の有無の主効果が有意であ

り, ASD 者の言及率の平均値が TD 者よりも有意に高かった。さらに, 「J 感情のズレ」「K 性・恋愛」においては, ASD 者の言及率の平均値が TD 者よりも有意に低い傾向がみられたが, これらのカテゴリーではそれぞれ ASD 者の言及数が皆無ではないものの極めて少なかった。なお, 「C 失言・意地悪」「E 道徳」「H ネガティブ感情」「I 関係性」「K 性・恋愛」で年齢群の主効果が有意であり, 高校以上の言及率の平均値が有意に高かった。ただし「I 関係性」は, ASD 者の言及数が極めて少なかった。

(3) ASD 者の「気まずさ」の認識に添った対人関係支援

本研究では, 社会性の発達において重要な指標となる気まずさの認識について, TD 者の発達段階を示したうえで, ASD 者の特徴と発達を明らかにした。結果に基づき考えられる ASD 者への対人関係支援について, 以下に述べる。

例えば, 「雰囲気乱す」「他者の存在」は, TD 者において小中学生よりも高校以上で言及が増加する気まずさであるが, ASD 者において発達差は示されなかった。ASD 者にとっての思春期青年期は「仲間との関係の深まりを希求し始める時期(田中, 2015)」であるにもかかわらず, 一般的にそのような年代の人々が気まずいと認識しやすい言動を, ASD 者は無意図的にとってしまいやすいことがうかがわれる。そのため, TD 者側からすると ASD 者は気まずさを生じさせる存在として受け入れられにくく, ASD 者側からすると仲間関係を深めたいのにどうしていいのかわからない, 自分の言動のどこが周りからずれているのか気付かないといった状況に陥りやすいことが考えられる。このような状況が, 思春期青年期の ASD 者の不適応や不登校など二次障害につながる危険性もあることから, 特に思春期青年期の ASD 者に対しては「雰囲気乱す」および「他者の存在」に関する気まずさの認識がどのような場面で起りやすいのか, ASD 者が見落としがちな他者どうしの視線の向きや会話の方向性(どの人とどの人が話しているのかや, 今何が話題になっているのかなど)を具体的に説明する中で場面の理解を促す支援が必要である。その際, 本研究において ASD 者が認識しやすい特徴が示された「不都合」「想定外の言動」などに関する場面や状況で ASD 者自身が実際に体験した情動を基に, 他者がどのような場面でその情動を感じやすいのかを, かかわり手とともに丁寧に振り返る作業が, ひとつの有効な手段となることが考えられる。それは, ASD 者が認識しにくい気まずさを TD 者同様に認識させようとするものではなく, あくまで ASD 者自身の感じ方を尊重したうえでの他者理解の促進である。そもそも ASD 者にとって認識しにくい気まずさを認識させようとしても, それは日常における気まずさの感じ方と

は異なり、本来の意味で気まずさを認識しているとはいえず、ここに本研究の限界点がある。

別府(2012)は、ASD 者側の独自の感覚や理解に TD 者側が寄り添い共感することによって、ASD 者への情動共有経験の保障が可能となること、またそれは、ASD 者にとって他者と通じあえた安心感をもたらすことで自分の情動や心をとらえたり、自分と異なる他者の思いを認める姿につながることを指摘している。「ASD 者は気まずい言動をする」「気まずさを認識できない」などと決めつけ、一方的な行動の改善や修正を求めるのではなく、ASD 者が認識しやすいまたは認識しにくい気まずさや、発達とともに認識が変容する気まずさ等、様々な気まずさがあることをかわり手が理解したうえで、ASD 者の認識のしかたを中心とした対処方法をともに考えていく姿勢が求められる。

<主な引用文献>

Baron-Cohen, S., O'Riordan, M., Stone, V., Jones, R., & Plaisted, K. (1999). Recognition of faux pas by normally developing children and children with Asperger syndrome or high-functioning autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **29**, 407-418.

Bowler, D. M. (1992). 'Theory of Mind' in Asperger's syndrome. *Journal of child psychology and psychiatry*, **33**, 877-893.

Callenmark, B., Kjellin, L., Rönqvist, L., & Bölte, S. (2013). Explicit versus implicit social cognition testing in autism spectrum disorder. *Autism online first version*.

Happé, F. G. E. (1994). An advanced test of theory of mind: Understanding of story characters' thoughts and feelings by able autistic, mentally handicapped, and normal children and adults. *Journal of autism and developmental disorders*, **24**, 129-154.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計16件)

滝吉美知香・鈴木大輔・田中真理(印刷中) 自閉スペクトラム症者における「気まずさ」の認識に関する探索的研究 発達心理学研究 (査読有)

Tanaka M.(修正採択) Crisis Management and Disaster Prevention System at Special Needs Schools during Great East Japan Earthquake, *Journal of Special Education Research*. (査読有)
田中真理 (2016) 障害児支援を考えるモ

ノサシとは：多義性と合理的配慮、発達心理学研究,27(4), 312-321. (査読有)
松崎泰・滝吉美知香・高田弘子・田中真理 (2016) 心理劇を通してみられたある青年期 高機能自閉スペクトラム症者の共感と自己理解の変容過程. 心理劇,21(1),35-46. (査読有)

松崎泰・川住隆一・田中真理 (2016) 思春期・青年期の自閉スペクトラム症者における共感の特性：自己注視的・他者注視的認知過程に焦点を当てて、発達心理学研究,27(1),1-9. (査読有)

田中真理 (2016) 震災に遭った子どもに起きること、教育と医学、762. 52-59. (査読無)

田中真理 (2016) 大学における発達障害学生支援の現状と課題 - 「移行期」の支援とは - ,平成 27 年度第 37 回全国大学メンタルヘルス研究会報告書,43-51. (査読無)

永瀬開・田中真理 (2015) 自閉症スペクトラム障害者におけるユーモア体験の認知処理特性：分かりやすさの認知と刺激の精緻化の影響, 発達心理学研究, 26(2),123-134. (査読有)

永瀬開・田中真理 (2015) 自閉症スペクトラム障害者におけるユーモア体験の認知処理に関する検討：構造的不適合の評価と刺激の精緻化に焦点をあてて、発達心理学研究, 26(1), 35-45. (査読有)

田中真理 (2015) 発達障害者の青年期をめぐる「移行期」支援, 教育と医学,749、924-932. (査読無)

松崎泰・川住隆一・田中真理 (2015) 思春期・青年期の自閉スペクトラム症者における共感の特性 - 対人恐怖心性と、恐怖を抱く人物への自己注視的認知過程のとりやすさとの関連 - . 東北大学大学院教育学研究科年報,64(1),75-90. (査読無)

李熙馥・田中真理 (2015) ある自閉スペクトラム症者における書き言葉によるパーソナルナラティブの変容 - 自己理解・他者理解の変容との関連 - , 東北大学大学院教育学研究科年報,63(2), 99-123. (査読無)

永瀬開・田中真理・川住隆一 (2015) 自閉症スペクトラム障害者のユーモア体験に関する研究動向 - ユーモア体験を喚起させる認知処理過程の視点から - , 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 63(2), 167-181. (査読無)

田中真理 (2015) 思春期における「発達障害」との出会いと孤立 - , 教育と医学,739,4-12. (査読無)

松崎泰・田中真理 (2014) ある青年期自閉症スペクトラム障害者の共感性 - 心理劇のロールプレイング場面における自己注視的役割取得と自己指向的感情から - , 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 63(2), 257-268. (査読無)

永瀬開・田中真理・川住隆一(2014)自閉症スペクトラム障害者のユーモア体験における意味性の評価 - 意味性の評価がユーモア体験に与える影響と意味性の評価の理由回答 -, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 63(1), 103-118. (査読無)

[学会発表](計 13件)

横田晋務・松崎泰・田中真理(2017年3月27日)発達障害への潜在的態度と障害に関する知識との関連 日本発達心理学会第28回大会, P7-50, 広島大学(広島).

鍋倉康平・川住隆一・田中真理(2015年9月)青年期 ASD 者の自らの発言による「気まずさ」への気づき - 補償の方略による回答開始時間に注目して -. 日本特殊教育学会第53回大会, p19-24, 東北大学(仙台).

永瀬開・川住隆一・田中真理(2015年9月)自閉症スペクトラム障害者のユーモア体験における刺激の精緻化 - 刺激の精緻化で想起する事柄に注目して -. 日本心理学会, 名古屋大学(名古屋)

松崎泰・川住隆一・田中真理(2015年7月)思春期・青年期自閉スペクトラム症者の共感の困難さに関する研究 - 恐怖を抱く他者への個人的苦痛の生起要因に着目して -. 日本発達障害学会, 東京学芸大学(東京).

Tanaka Mari (22th, May, 2015) Study of parents' causal attribution for the behavior of children with autism spectrum disorder. 15th World Congress of the International Association for the Scientific Study of Intellectual and Developmental Disabilities, International convention center, Hawaii.

松崎泰・田中真理(2015年3月21日)思春期・青年期自閉スペクトラム症者における対人恐怖心性と恐怖を抱く他者への自己注視的役割取得の関連. 日本発達心理学会第26回大会, P5-027, 東京大学(東京).

鍋倉康平・田中真理(2015年3月21日)青年期自閉症スペクトラム障害者における自らの失言による「気まずさ」の理解. 日本発達心理学会第26回大会, P5-035, 東京大学(東京)

李熙韻・田中真理(2015年3月20日)自閉スペクトラム症児におけるフィクションナルナラティブとパーソナルナラティブの特性, 日本発達心理学会第26回大会, P2-34, 東京大学(東京).

永瀬開・田中真理(2014年9月22日)自閉症スペクトラム障害者のユーモア体験における意味性の評価(2)-意味性の評価理由の探索的検討-, 特殊教育学会第52回大会, p4-H-8, 高知大学(高知).

松崎泰・田中真理(2014年9月21日)

思春期・青年期自閉症スペクトラム障害者の恐怖を抱く他者への自己注視的役割取得. 特殊教育学会第52回大会, P3-G-4, 高知大学(高知).

鍋倉康平・田中真理(2014年9月22日)青年期 Autism Spectrum Disorder 者における「気まずさ」検出-自らが発信者になる場合に注目して-, 特殊教育学会第52回大会, p4-H7, 高知大学(高知).

横田晋務・田中真理(2014年9月22日)自閉症スペクトラム障害児における欺き行為と実行機能の関連, 特殊教育学会第52回大会, P5-F-5, 高知大学(高知).

永瀬開・田中真理(2014年9月13日)自閉症スペクトラム障害者のユーモア体験における意味性の評価(1)-意味性の評価がユーモア体験に与える影響に関する検討-, 日本心理学会第78回大会, 同志社大学(京都).

[図書](計3件)

田中真理(2016年8月)社会性・コミュニケーションの発達と自己理解、「発達障害のある子の社会性とコミュニケーションの支援教育ナビ」、柘植雅義監修・藤野博編著、金子書房、38-44.

田中真理(2016年1月)「発達障害者と高等教育機関での支援」、日本発達障害学会監修、キーワードで読む発達障害研究と実践のための医学診断/福祉サービス/特別支援教育/就労支援、福村出版、30-131.

田中真理(2015年12月)発達障害学生に関わる相談と対応、「もっと知りたい大学教員の仕事」、羽田貴史編著(分担執筆 筆者28名)。ナカニシヤ出版、36-47.

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 真理 (TANAKA Mari)
九州大学・基幹教育院・教授
研究者番号：70274412

(2) 研究分担者

鈴木 大輔 (SUZUKI Daisuke)
東北大学・東北メディカルメガバンク機
構・研究支援者
研究者番号：70455814

滝吉 美知香 (TAKIYOSHI Michika)
岩手大学・教育学部・准教授
研究者番号：00581357
(平成28年年度より辞退)

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()